

鏡コノエ

illustration

有馬かつみ

とろけるほど
抱きしめて



とろけるほど抱きしめて

《立読み版》

鏡 コノエ

イラスト 有馬 かつみ

【序章】

天井てんじょうに描かれた白い三日月の上に、薄桃色の兔うさぎが二羽仲良く寄り添っていた。

月を囲むようにして散りばめられた星の一つ一つが瞬く間を、流れ星が軌跡を描きながら音もなく抜けていく。子どもが見たら大喜びしそうな光景を涙まじりに見上げながら、司直つかさなおゆき之は浅い呼気とともに体を震わせていた。

「は……あ、……す、すませ………手……汚れて………」

覚悟した以上の強い絶頂感のせいで、たどたどしく謝罪した直之は、男の大きな手の平を見下ろしていた。眼鏡を外しているせいで視界はおぼろげだが、彼の手の中で達したのは間違いない。

「き、気持ち悪いですよね？　すぐにシャワーを………」

「いいんだ」

「でも、」

「俺がいいと言ったらいいんだって。——むしろ、すげえそそる」

ぶっきらぼうで乱暴な口調の男は、直之の手を払い精液に塗れた手で内股を撫でた。

「……………」

やわらかな肉をぬめりで汚した彼の手は、茂みを掻き回して淫袋を優しく握り込む。

達したばかりの軀を煽るような愛撫に、直之は気だるい溜息を吐きながら男の胸に凭れる。すると首筋に喰らいつくようなキスがはじまった。

「……………アツ……………あ！」

皮膚を灼かれるような刺激に、掠れた悲鳴が口から零れていた。

一度目の絶頂の余韻がまだ抜け切れていない軀は、どこもかしこも敏感過ぎて洩れる声を押さえきれない。

「少し……………す、少しだけ休みましょう？ 僕、まだ……………ふあ……………！ あ、あ……………っ」

裏腿を掴まれた直後に軽く揺さ振られて、直之を深く貫いていた男芯がずるりと引き抜かれた。内壁を擦る摩擦のおかげで、落ち着いたばかりの下腹部がまた疼きだすと、雄々しいそれが直之のなかへと容赦なく沈められていく。

官能を揺さ振る気持ち良さに直之が喘ぐと、背後の男までが呻いた。

「あんたの中、すげえな……男ってこういうものなのか……？」

「あつあつ……っあ、あ……！ や、やめ……ふじま……さん……っ……ッ」

無粋な問いかけに、直之は色素の薄い髪を左右に振るだけだ。

さらさらとしているはずの髪は汗にしっかりと濡れていて、額やこめかみに張り付いて鬱陶しかった。しかし今の直之に払う余裕は無く、男に揺さぶられるまま断続的に喘ぐ声を洩らしている。

藤間義隆と名乗る男は「今日はじめて男を買った」——と、ラブホテルの一室に入るなり、そう言った。

百九十もあろうかという高身長に広い双肩。バスケットボールかバレーボールの選手のような体軀は、女といわずに男にもモテそうな感じだ。魅力的な軀。突然街で声を掛けられた直之さえ一目見るなりときめきを覚えてしまい、断りの言葉が浮かばなかった。

一人ずつシャワーを浴び、バスローブ姿で向き合ったあとで「ゲイセックスの経験も無い」と無愛想に付け足していたが、だからといって男に興味があつたわけじゃなく、当然ゲイセックスなんて青天の霹靂以外の何ものでもないという雰囲気だった。それがなぜか今や直之を翻弄して、余すことなくしゃ

ぶりつくそうとしている。

「い……ッ………あああ……—！」

仰向けあおむに押し倒されると、藤間の楔くわが抉えくるように最奥を刺激して、直之は背中を大きく撓しならせていた。

不意を突くような強い快感に、達して間もない下芯から白濁した汗が噴き、白く濁ったそれが腹部に点々と落ちて肌の上を滑り落ちていった。

二度目の絶頂だった。

気持ちも軀も整理できていない状態での絶頂は、全身から氣力を根こそぎ奪い、泥のように重たくする。

「は……、あ………」

直之は首筋を反らしたまま小刻みに吐息していた。そんな直之を見下ろしながら、藤間がゆるゆると腰をくねらせる。

「すげえな。……めちゃくちゃ締まるぜ………それにあんた………ッ」

言葉の途中で身震いした藤間は、二度三度と大きく息を吐いたあとで、苦しそうな表情にうつすらと

笑みを滲にじませた。

「大人おとなしそうなくせして、……股を開いた途端に、エロい顔をする……………」

「あ……………藤間さん……………っ……………」

藤間が萎えたばかりの直之の下芯を掴み、断りもなく扱きはじめていた。

休む間もなく与えられる愛撫に直之はおののいて、かぶりを振って嫌がった。しかし男の軀むねを知ったばかりの藤間は、物珍しい玩具を手に入れたような目をして、直之の軀むねをこれでもかと貪むさぼる。息が苦しい。

「も、もう……………っ、本当に、……………駄目……………！ ダメです……………っ」

「あと一回……………っ。あんたのイク顔が見たいんだ」

「そんなの……………っ」

強引だ。見たところで面白くもなんともないのに。

「イけるだろ？ ……あんたのいいところ、突いてやるからさ」

言うや、藤間が腰を力強く打ち付けた。

パン、パンと、肉と肉がぶつかる激しい音とともに、膝が深く折られて息苦しい。とけてしまうよう

な快感が体内を駆け巡り、助けを求めるように枕の耳を掴む。

「やつ、や……………っ……………！ イク……………！ また……………また……………っ」

恐れにも似た心地に襲われながら、直之は瞳を見開いた。しかし涙に濡れた視界は、白く霞んでいてよく見えない。

「藤間さん……………ッ！」

絶頂が近かった。

また、浅ましい快感に意識が揺さぶられる。

「僕……………僕……………う……………！」

「いけよ。——直之」

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

とろけるほど抱きしめて

《立読み版》

発行日 2012年3月9日

著者名 鏡 コノエ

イラスト 有馬 かつみ

発行所 【MILK CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) konoe Kagami 2012

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。